1959年1月31日第3種郵便物認可（月615円〒160円、会員は会費に含む）

週刊 うたごえ新聞

12／2・9（2002年）

NO. 1867

THE SINGING VOICE OF JAPAN（UTAGOE）
日本のうたごえ全国協議会機関紙
うたごえ新聞社
〒169-0072 東京都新宿区大久保2－16－36
☎03（3209）0638 FAX03（3200）0105
E-Mail＝utashin@pop06.odn.ne.jp
振替口座 00120－6－5631 毎週月曜日発行

ニュースは心の栄養ばい

"ニュースの職人"・鳥越俊太郎氏に聞く

今月の"ときめきインタビュー"は「スーパーモーニング」（テレビ朝日）のレギュラー、ニュース・キャスターとはご本人は言われない「ニュースの職人」、福岡出身の鳥越俊太郎さん。鳥越さんの番組「ザ・スクープ」がなくなる時は存続を求める声が局に殺到した。シャープなニュースの切り方は注目を集めている。お母さんの鳥越綾子さんは2002年日本のうたごえ祭典・福岡よびかけ人でもある。「スーパーモーニング」は月～金曜日、朝8時スタートで、局入りは朝4時という鳥越さんに、なんと夕方という時間にお会いできた。ええっ、うたごえをやっておられた！ 鳥越さんの歌声も聞かせてもらう（11月14日、テレビ朝日で）。

編集長 三輪純永の

今月の ときめきインタビュー

三輪　お母様の鳥越綾子さん（お母さんコーラス連絡会前会長）には今度の福岡での日本のうたごえ祭典でも音楽会の指揮などご協力いただいています。

著書の「ニュースの職人～『真実をどう伝えるか』」も読ませてもらいました。「ニュースは心の栄養源」、これですね。鳥越さんの切り口に惹かれるのは。その視点から北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の拉致問題について聞かせて下さい。先日も「キューポラのある街」の映画を紹介しながら、あの映画を見て関わった者としてはこの問題を見届けていかなければいけない、と話されていましたが。

♥♥北朝鮮を追う原点「キューポラのある街」

鳥越　番組で言ったように、僕は学生時代は京都でしたから、関西には在日の人が多く、京都にも朝鮮人学校もあり、結構身近に感じていました。大学時代に観た吉永小百合主演の「キューポラのある街」、強烈に印象に残っているシーンがあるんです。吉永小百合の弟の友だち、お父さんが在日朝鮮人、お母さんは確か日本人だったと思いますが、北朝鮮に帰っていくのを川口（埼玉県）の駅前まで送っていく、新幹線がない頃だったから列車で新潟まで行くシーンです。

当時、帰国事業を僕らも、在日の人たちは日本で差別を受け、つらい思いをしながら生きてきた、ようやく祖国・地上の楽園北朝鮮に帰れる、そう思っていた。その後、新聞記者になってだんだんわかってきたのは、北朝鮮というのはどうも僕らが思っていたのとはだいぶ違うね、ということ。僕は、社会主義の国で金日成から金正日への世襲なんておかしい、とまず思ったのですよ。その後も見ているとやっぱりおかしいな、と。

▲月～金、テレビ朝日の「スーパーモーニング」レギュラーの鳥越さん

91年に北朝鮮の核疑惑が出た時、僕はもうテレビをやっていて、取り上げようと提案した。核疑惑はその後94年、実際にアメリカと北朝鮮が交渉して原発を止めて軽水炉を供給する、いわゆるKEDOができましたが、その3年前です。でもその頃はだれも相手にしてくれないほど日本では関心が持たれていなかったんです。

僕は後に絶対、問題になると思って提案したけれど、テレビは映像がないと成立しないから、国交もないわけで、だれもやろうと言わない。何度も提案しているうちに、たまたま移動で来た若いディレクターが何にも分からないものだから「やろう」と手を挙げちゃった。それで一緒に、モスクワから2～3時間はなれたドゥブナという核化学研究所に行きました。そこには北朝鮮からの留学生や研究者がいっぱい来ていて、僕らが取材で入るというだけでみんな町の外へ逃げちゃった。それを取材して放送しました。

（4、5面につづく）

12月2・9日合併号
◆ず～むあっぷ沖縄の雲へ（神戸・東京公演）／音楽物語「命の森」
（うたごえサークル春の森・北海道）3面◇地域にあたたかい風・
うたごえ喫茶特集 北海道、秋田、大阪、東京から 4・5面◆
〔連載〕ミュージック・トゥデイ（和田静香・日下部吉彦）／試聴室 和太鼓らいふ／青春BBS◇
◆楽譜紹介「あじさいの花びら」10面 どこへ行く音楽業界 11面
新シリーズ「みんなで楽しく学びたい」"教育現場で"／池辺晋一郎の「空を見てますか」12面

ふめんだい

このところ、物事を判断する上での「基準」（モノサシ）について語られる場面をよく目にする。それはもちろん9・11以降のアメリカの際限のない「戦争拡大政策」に対して、私たちは何が出来るのか、の答えとしてだ。

☆　★　☆

そんな中で井上ひさし氏の「あてになる国のつくり方」を読んだ。「あてになる」というのもひとつのモノサシだろう。日本国憲法の精神もつづめて言えば「平和主義を貫くことによって世界からあてにされる国になろう」という誓いだ。この自ら掲げた信念を放り投げて「あてにされない」国に貶めようとするのが、まさに「有事法制」だ。この本の副題は「フツー人の誇りと責任」。今こそフツー人の一人ひとりの願いを掘り起こしながら、すべての戦争へのたくらみをやめさせるのが未来への責任。

☆　★　☆

この本の中で「バタフライ効果」という理論も初めて知った。「数羽の蝶の羽の動きがあたりの空気をわずかに震わせる。それだけのことで終わってしまうのが常だが、しかしじつにしばしば、その空気のかすかな動きが次つぎ伝わって行って大きな波動を呼び、ついに気圧図をも変えて大嵐を発生させる」のだという。この福岡祭典の成功はもとより、私たちの運動全体がこの波動として動き出すように、大いに羽を震わせたいものだ。（Y）